

興福寺南大門の調査（平城第458次）

11月7日、興福寺では中金堂再建の地鎮祭が厳かに執りおこなわれました。享保2年（1717）の伽藍焼失から約300年。現在は寺観の復元・史跡地としての整備が進んでいます。南大門の発掘調査もその一環で、2009年7月中旬より調査を開始しました。調査面積は約780㎡です。

調査の結果、南大門の基壇は近代に大きく削られていましたが、礎石とその抜取穴から、門は桁行5間×梁行2間で、東西23.1m、南北9.0mに復元できます。礎石は花崗岩で、多くは抜き取られています。据え直しの形跡がないことから、創建時のものでしょう。また、基壇上では金剛力士像の台石を検出しました。西側のそれらは一辺約2.8mの穴の内側に切石を並べたもので、中世の基壇改修時に力士像の台石として転用したのでしょう。

基壇の縁辺では平安および室町時代の地覆石とその抜取溝を検出しました。平安時代の地覆石は基壇北辺と東北隅・東南隅に残り、同時期とみられる玉石敷も残存していました。一方、室町時代のそれは南階段の南辺に残るのみですが、その抜取溝が基壇の周囲をめぐるっていました。なお、創建時の地覆石は遺存しませんが、その据付痕とみられる溝を複数箇所確認しました。

今回の調査でとくに印象深いのは、一般の方々からのご質問がとりわけ多かったことです。現地見学会では2,000名を超える方々にご来場いただき、たいへん盛況となりました。（都跡発掘調査部 森川 実）



南大門全景（東から）